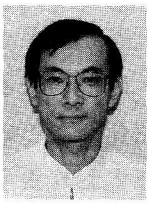
医療連携
つつじ
第　6　号
平成16年8月1日

発行　社会保険中央総合病院　東京都新宿区百人町３－２２－１
http://www.shahochu.com/

医療連携室 TEL & FAX　０３－３３６４－０３６６

1.29 社会の中での産科医療



産婦人科部長
北　川　浩　明

1.29という数字を覚えていらっしゃいますか。6月に発表された昨年のわが国の合計特殊出生率のことです。この数字は、「一人の女性が一生涯に産む子供の数」を表しています。世の中の半数は男性ですので、社会の人口を維持するには合計特殊出生率が最低2.0である必要があります。平成元年に「1.57ショック」と言われましたが、その後も低下傾向は止まらず、ついに1.3を下回るようになりました。もはや諦めのムードが漂っていて、マスコミ的には大きな話題とはなりませんでしたが、社会の行く末は少子化の次に来る人口減少です。

1.29の原因は複合的な要素が考えられますが、その一つに出産・育児に対して女性が魅力を感じなくなったことが挙げられるでしょう。戦後の平等社会で女性は社会人として正しく評価され活躍の場が広がりましたが、その反面専業主婦への評価は低く、育児中の女性に対する社会制度や配慮もまだまだといわざるを得ません。また、女性の育児への自信のなさも1.29に貢献していると考えられます。このような少産の時代だからこそ、次世代を担う子供たちの出生は大切にしたいものです。私たち社会保険中央総合病院の産科チームも、助産師，看護師，小児科の医師と連携を取りながら、新しい病院産科医療の姿を求めて挑戦を続けています。

昨今、「安全で快適なお産」を求める声が医療関係者の間からも聞こえてきます。安全への努力は必要ですが、「お産は楽だったがそのあとの育児は地獄・・・」では何にもなりません。お産は楽しいことではあっても、決して楽なものではありません。考えてみれば世の母親たちは、昔からお産を体験することで自分のからだと向き合い、潜在していた自らの力を実感して育児に対する自信を体得してきたはずです。私たちも「自分のからだが持っている力でわが子を産み育てること＝自然分娩と母乳栄養」がお母さま方の出産・育児に対する自信に繋がると考えています。

さて、最近の当院での産科医療サービスの一端を紹介します。「自然で家庭的な分娩」を理念として、分娩では母子の安全を目指すことはもちろん、自然の力でのお産を支援しています。次に、出生直後のカンガルーケアや産後の母児同室を行い、母子の接触を通して自立哺乳の確立を援助しています。また夫の分娩立ち会いはもちろん、立ち会いまでは望まない場合でも陣痛室で夫が終日付き添えるようにし、出生後には分娩室で親子３人で過ごしていただくなど、家族の絆の形成を大切にしています。一方、快適さも大切ですので、産後の生活には心を配り、お母さま方が十分な休息をとれるようにお部屋を整えるなど工夫を凝らしています。まだ理想の姿には遠い面もありますが、今後もお母さま方が安心して出産し、その後の育児に備えられるように努めてまいりますので、よろしくご指導・ご支援をお願いいたします。

診療科紹介

呼吸器内科

内科部長
徳　田　　均

私が平成３年当院に着任し呼吸器内科を始めてから早いものでもう１３年になります。規模は小さくとも内容では都内のどの病院にも負けぬ呼吸器内科を創ろうと志し，こつこつと努力して参りました。人員，規模，ほぼゼロに近いところから始めましたが，幸いに病院内のスタッフの協力，良き研究仲間，そして地域医師会の先生方のご支援などに恵まれ，市中病院としてはほぼ都内最高レベルに達する事が出来たように思います。患者様の御紹介，あるいは研究会などで勉強の機会を与えて頂いた地域の先生方には厚く感謝申し上げております。この間，近隣で共に呼吸器の診療に携わりつつ情報交換，切磋琢磨してきた呼吸器専門医が，ここ１，２年でそれぞれのご事情で新宿を離れられ（樫山先生：大久保病院，加藤先生：厚生年金病院，陶山先生：河北病院），淋しく思っています。一方そのせいもあるのか，最近御紹介患者が増え，入院患者は常時５０名前後という状況となりました。やや実力に余る規模との懸念もありますが，幸いに若いスタッフの溌剌とした活動を得，お預かりした患者様については，その人に最も適した医療を，迅速かつ的確に，そしてよく説明し納得を得て施行できているかと思います。

都内の有名病院の中には，部長は外来をやるのみで，入院患者はレジデント，研修医任せという病院もあるかのように聞きますが，私は全入院患者についてカンファレンスを週２回行い，診療方針を討議し，指示を与え，必要な局面では説明等私自身が行うよう努めています。内科病棟は３病棟ありますが，当院の運営方針として，緊急患者についてはその時空いている病棟に入ります。その結果しばしば内科病棟以外にも患者が散らばる事になり，呼吸器科としてのまとまった回診は不可能で，全ての患者様に顔出しする事が出来ないのは残念ですが，内容的には十分御納得して頂ける医療を展開できていると自負しています。最近一段と患者様達のご信頼が厚くなった事をひしひしと感じています。

呼吸器疾患はその種類が元来とても多く（腫瘍，感染症，アレルギー疾患，呼吸不全など），加えて新しい疾患が次々と加わり，それらの診断法，治療法も急速に変貌するなど，最新のレベルを確実に取得し医療の場に実現して行くのは容易ではありません。そのためには専門学会での活動もさることながら，地域の先生方の参加を得た研究会活動が不可欠と考えております。私は１０年あまり前からＪＲ東京総合病院の山口先生と組んで新宿呼吸器研究会を月例で開催しておりますが，常にフレッシュな内容であらしめたいと努力し皆様のご支持を頂いております。年２回ほど日経メディカルに掲載されますので，ご存知の方も多いかと思います。最近１年間は「びまん性陰影を呈する疾患」を主題に，癌，感染症，特殊であるが臨床医として知っておかねばならぬ病気などを検討してきました。何よりも自分たちの症例を見つめ直し，自分たち自身が勉強する会と位置づけています。最近は若い開業医，クリニックの先生の御参加も増えてきました。地域の先生方の積極的な御参加をお待ちしております。